

緑爽会会報 No. 166

2020年2月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

1 2月忘年会、佐藤淳志会員によるお話 「鳥海山のイヌワシ保護の現状について」

実施日：1 2月21日（土）

出席者：24名（会員外、近藤緑さんのご子息・岳彦さん）

後掲写真参照（写真には写っていませんが、関塚さんもお出席です）

昨年1 2月の忘年会に先立って山形からお越しいただいた佐藤淳志会員より、標記演題でお話をいただきました。2013年1 2月にもお話をいただいておりますが、今回はその後の取り組み、現状ということで資料や写真も用意していただき、興味あるお話を伺いました。

イヌワシとの関わりは1990年、三島で開かれた自然保護全国集会で「鳥海山麓に大規模スキー場建設計画が持ち上がっている。日本山岳会自然保護委員会で検討してほしい。」と提起したことから始まった。委員会としてすぐに視察に来ていただき、その後1993年に、イヌワシが生息しているようだとの話があり、尾瀬で開かれた全国集会で実態調査することを決定。その結果をまとめた報告書は各地に配布され国会図書館に収められているものもある。結果的に開発は中止となり、ここにおられる自然保護委員会の皆さんにとっては終わっている話だが、関山先生に「スキー場開発中止のためだけに調査をするのか」と問われ、私はこの調査をライフワークとして続けていくと約束した。（2000年2月鳥海山ワシタカ研究会発行の「鳥海山南麓のイヌワシ」という報告書とレジメが配られた。この報告書は巣が崩落した後の対応の他、関山房兵先生の基調講演が収録されているので、ぜひ読んでほしいとのことでした。また佐藤会員自ら撮影した美しいイヌワシの写真も席上回覧されました。）



レジメに沿ってイヌワシの分布と生態について、繁殖期の求愛期・造巢期・抱卵期・巣内育雛期から巣立ちへという流れが説明された。このサイクルにもとづき、時期によっては工事の中止を求めることができるという。

生態系の頂点に立つイヌワシがいるということは、それだけ豊かな自然があるということである。今国内に500羽いると推定されるが、佐藤さんは600羽はいると考えておられる。（大型鳥類の情報はなかなか出てこないという面もあるそうだ）ただ餌となるブナの実や山ブドウの結実状況

と繁殖率は関係しており、2019年は凶作だったので産卵がどうかとのことだった。山ブドウに関しては、それを摘んでワインを作っていると、2015年物、19年物の2本を持ってきていただき、後の忘年会でいただくことができた。写真も500ミリの望遠を手持ちで撮られるということで、飛翔する美しいイヌワシの写真をお見せいただいた。自分の撮ったものはプレゼントするとおっしゃられたのであつという間に手が伸び、なくなってしまった。観察、調査という目的をライフワークとされ、山に親しんでおられる佐藤会員をうらやましく思ったことでした。(尚、前回のお話は会報124号に詳しく載っています。また当日の資料一式は104号室内の緑爽会倉庫に保管しておりますのでご覧いただけます) (荒井記、写真：小泉義彦)



2019.12.21 緑爽会忘年会

夏原寿一 西谷可江 渡邊貞信 西谷隆亘 近藤岳彦 梨羽時春 瀬戸英隆 山川陽一 石井秀典 小林敏博 荒井正人 小泉義彦

石塚嘉一 川口章子 藤下美穂子

渡部温子 島田稔 川嶋新太郎 松本恒廣 佐藤淳志 富澤克禮 近藤緑 深田森太郎

1月初詣山行「子ノ権現」

小林 敏博

実施日：1月10日（金）

参加者：10名（渡部温子、島橋祥子、島田稔、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、石塚嘉一、荒井正人、小林敏博）

今年の初詣山行は干支の「子年」に因み、奥武蔵の「子ノ権現」を訪れた。冷たい風の吹く寒い一日だったが、抜けるような青い空が終日、広がっていた。

集合時間前には全員が吾野駅に集合、可愛い焼きお握りや羊羹が皆に配られ小腹を満たしたところで歩き出した。駅前を緩やかに下って法光寺手前を左に線路をくぐり抜け、線路に沿った道を25分歩くと東郷公園・秩父御嶽神社に着く。冷えた体もようやく温まったので衣服調節し、新しく建てられた里宮遙拝殿に参拝する。ここからは青場戸川左岸の舗装道を緩やかに登っていく。霧が多いせいか、川の上に伸びた枝にはサルオガセが延々とぶら下がっていた。舗装道だが、路傍の古い馬頭観音が古道の雰囲気を醸し出している。そろそろ疲れてきたところで浅見茶屋が現れ、茶屋の前で一息入れた。

茶屋からやや急坂の舗装道をひと登りすると、降魔橋に着く。脇に子ノ権現から十二丁目との石碑があった。橋を渡ると山道になる。古い石の階段が続く。段差はそれなりにあり、ゆっくりと登

っていく。途中の小休止では、配られるドライフルーツ、チーズや飴などが疲れを癒やしてくれた。道はやや急坂となりジグザクと登ると、目の前に舗装道が不意に現れる。子ノ権現の駐車場に続く道だった。舗装道を横切りさらにひと登りすると、樹齢およそ800年といわれる二本杉に着く。



二本杉から広い参道を鳥居、黒門、朱色の仁王像の間を通っ

て子ノ権現本堂へ。皆さん、お賽銭を投げ入れてそれぞれ願をかける。さらに本堂裏手から奥の院へ登って、見晴し台から東側が大きく開けた展望を楽しむ。都心のビル群やスカイツリーもくっきりと眺めることができた。「東京タワーも見える。」との声に、皆は「どこどこ？」と目を細めて探す。

昼食は子ノ権現を竹寺方面へ数十mほど下ったところにあるベンチでとる。先に宴会を始めていた中高年グループが席を譲ってくれた。細長いテーブルに10の皿が並べられ、渡部さんお手製のエビチリ、鶏の唐揚げ、数種類の野菜のサラダ、石塚さん提供のミカンが盛り付けられた。“恒例”の八海山の甘酒が富澤さん、荒井さん持参のバーナーで温められる。北側の斜面が冷たい風をさえぎり、暖かな冬の陽だまりの中で豪華な午餐を楽しんだ。出発間際、落ち葉の間から伸びる1本のハハコグサが黄色の花を付けていた。温暖化の影響かと、富澤さんが高尾山でタツナミソウが咲いていたことも付け加えた。

下山は小床口参道コースを西吾野駅へ向かう。二本杉まで戻り、舗装道を吾野駅への道標を過ぎてさらに少し下ると、西吾野駅への道標がある。杉林に囲まれたしっかりとした山道を下っていく。天寺十二丁目石のある峠ノ前で一休みしてさらに下っていく。やがて勾配も緩やかになり、石のゴロゴロした細い枯れた沢のような道を歩くようになると、じきに小床の最奥の集落脇に出た。ここからは舗装道となり、無事に西吾野駅に到着した。

反省会は、都合のある荒井さんと田井さんを除く8人で、飯能駅前にある、島田さんがご存じの中華店で催す。飲み物1杯につまみ3皿のお得なセットを注文すると、テーブルに並べられないほどの料理が出てきてびっくり。安い料金で十分楽しめた。

(参考) 行程記録

吾野駅 9:30→9:55 東郷公園・秩父御嶽神社 10:05→10:45 浅見茶屋 10:55→11:25 登山道で休憩 11:35→11:50 二本杉→12:00 子ノ権現 (昼食休憩) 13:20→13:25 二本杉→14:00 峠ノ前 (天寺十二丁目石) 14:10→14:40 小床集落→15:00 西吾野駅

ところで、今回の初詣山行は当初、子ノ権現から竹寺を経て名栗車庫に下りる予定だった。12月上旬に下見をしたのだが、事前に豆口峠～竹寺間で先の台風により登山道が崩落、通行止めとの情報があったので、コースを豆口峠から直接、名栗車庫へ下りるコースに変更した。吾野駅からのルートを取ると、豆口峠～名栗車庫間で登山道が崩落して通れない場合、吾野駅まで戻らねばならないので、下見は名栗車庫から逆コースを歩くことにした。

下見当日、名栗車庫から豆口入林道を5分ほど進むと林道が崩落していた。林道を外れて山の斜面を直登する新しい踏み跡がわずかにあったので、そこを40～50m登ると、再び林道に出た。そのままさらに5分進むと、通行止めのロープが張られていて、その先の林道がごっそりとえぐられ、かなりの本数の木々が崩落した跡に横倒しとなっていた。急斜面の高巻きも危ないので、名栗車庫まで戻り、竹寺経由で子ノ権現へ向かった。竹寺～豆口峠間で1カ所崩落していたが、無事に子ノ権現に着くことができた。富澤さん、荒井さんと昼食をとりながら相談した結果、子ノ権現～竹寺のコースは歩行時間が長いこともあり、初詣山行の下山は西吾野駅にしようとして決め、西吾野駅へ下山し、その山道に問題ないことを確認した。下見がいかに大切であるかを改めて感じた次第である。

崩落した豆口入林道⇒



初詣山行に参加して

石塚 嘉一

1月初詣山行で、奥武蔵の子ノ権現に行った。ほかに誰もいない吾野駅に10人が全員集合。渡部さんと田井さんから早速おやつをいただいて出発。高麗川を下の方に見て、子ノ権現への登り口にあたる東郷公園へ。そこから、舗装道路のゆるやかな上りを歩く。1時間足らずで、ちょっと息が切れたころ、安政2年の古民家だという浅見茶屋の前で休憩した。手打ちうどん（飯能うどん）が食べられるという。次は立ち寄りしたい、と思いながら歩きだした。すぐ先の滝不動から山道が始まった。我々には、なかなかの急登だ。いつものように、小林さんの先導で、リーダーの夏原さんがしんがり、ジグザグに登っていく。ところどころに「関東ふれあいの道」の標識があって、こんなところも「かんふれ」が通っているのだと思う。1月なのにちょっと汗ばむ頃、1時間ほどで、日が入らない山道から、舗装された参道に出た。

樹齢が推定800年、埼玉県指定天然記念物だという二本の大杉をしばしながめて、やっているのかいないのかわからない店で、みんなで食べようと、みかんを買った。赤い鳥居をくぐって山門に向かう。鳥居は、神仏習合の寺だということを示している。山門の柱には、天台宗天龍寺とあり、大鱗山の額がかかっている。大鱗山天龍寺が子ノ権現の正式名称なのだ。山門をくぐり、本堂に着いた。駅から2時間半かかった。古より足腰守護の神仏として霊験あらたかというので、みんなは、それぞれ真剣に願い事をしながら拝む。境内には、重さ2トンという大きな鉄のわらじが奉納されている。本堂の裏の山の上に鐘楼があって、ここが頂上だということに上った。大持山方面が展望できるということだが、よくわからなかった。見慣れた大岳山は遠くに見えたのだが、われわれのほかにはだれもいなかった。小さな札に「経ヶ峰640m」とあった。本堂の前に下りてきてみんなで記念写真を撮った。

寺務所のすぐ下の、竹寺へ行く広い山道にベンチがいくつもあって、昼食にすることになった。先客の男女のグループが既に食事をしていたが、使っていたベンチとテーブルの一つを我々にゆずってくれた。渡部さんが前日から用意された手作りの料理の数々をテーブルに広げて、一人ひとりに取り分けてくださった。さっき買ったみかんをサラダにのせて、豪華な食事が始まった。その間に、手分けしてザックに入れて上げてくださった甘酒が温められ、マイカップでいただいた。とな

りの先客のグループにも気前よくふるまった。この日参加予定来の12人分を持ってきたので、きつと重かったにちがいない。その分、疲れたからだに甘酒は格別に甘かった。ご馳走さまでした。真冬なのに、陽だまりでポカポカして、防寒具やアウターのウエアを脱いで、1時間ほどゆっくりくつろいだ。至福のひと時でした。帰りは小床口参道コースの山道を下って西吾野駅に出た。

～《寄稿/投稿》～

年次晩餐会で天皇陛下をご案内して

松本 恒廣

令和最初の年次晩餐会は即位礼正殿の儀を終えられたばかりの天皇陛下をお迎えして、昨年12月7日、新宿京王プラザホテルで会員500余名出席の下に開催された。

山岳会の年次晩餐会が最初に開かれたのは1950（昭和25）年11月、神田YMCAで名誉会員招待晩餐会として、次いで翌年からは年次晩餐会と称して開催されるようになったという。

（「日本山岳会百年史—クラブとしての伝統形成 関塚貞亨」）

陛下が初めて晩餐会に出席されたのは皇太子時代の1987（昭和62）年12月5日、市ヶ谷の私学会館（現在のアルカディア）で、会員番号10001番。当日はルームにお立ち寄りになった後、今西会長の先導でご到着、メインテーブルに着かれた。（会報「山」511号）この年入会した新入会員と共に壇上に立たれ、代表して挨拶された。

閑話休題—今年度の晩餐会会場での展示は、自然保護委員会とアルパインフォトクラブが担当した。古野会長が掲げた4つの活動方針の一つが自然保護であったが、今回はこれ迄の当会の自然保護活動の歩みをボードを使って展示した。また、今回のために新たに作成したA4、30頁ほどの「日本山岳会の自然保護活動の歴史と今」と題する資料集は大好評で、アツという間に品切れになってしまったという。

会場の展示は、1906（明治39）年、城数馬（山岳会発起人7名のうちの一人）が掲げた「高山における植物の保護」紹介記事から始まり、1964（昭和39）年、自然保護委員会の設立から初代委員長松方三郎、武田久吉、日高信六郎氏等のポートレート。次いで先に私が百年史のために作成した「自然保護のあゆみ」に加筆された、今日迄の自然保護活動を年表として紹介。また百周年を機に新たに発表された活動指針も紹介されていた。さらに、北海道、東京多摩、越後、石川、信濃、関西、四国、宮崎等、各支部自然保護委員会からの近況報告。委員会報「木の目草の芽」、高尾の森づくりの会の活動報告やデータベース「写真が語る山の自然今と昔」等が展示されていた。この他、理事会によってまとめられた「令和元年の台風及び豪雨による山岳被害状況—全国支部の被害調査」、山岳気象予報士でもある猪熊隆之会員の「2019年台風の特徴と、山岳による被害の差異について」という時宜を得た報告も好評だった。

18時、晩餐会が始まる直前、出席会員が各々のテーブルに着席している間に、陛下は展示会場をご覧になった。部屋には、陛下と古野会長、フォトクラブ代表の川嶋さんと私だけになった。一同記念写真に納まった後、まず自然保護関係のボードを丁寧にご覧になり、時折うなずかれながら見て回られた。特にご下問はなかったように思う。次の山岳写真のコーナーに移ると、ご自分もお好きなだけに作品を前にして何かリラックスされた様子で川嶋さんと談笑されているのを見て、和やかな雰囲気を感じたことでした。

幻の「銀山平探検記」

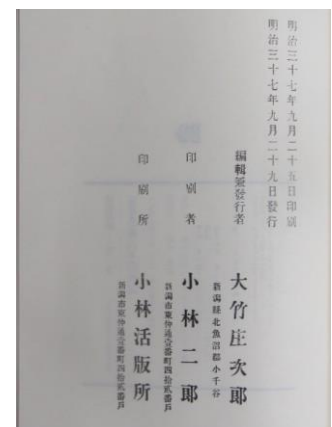
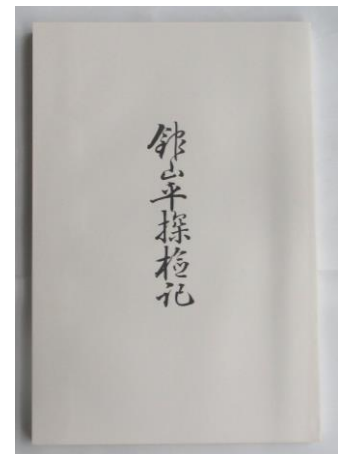
吉田 理一

奥只見郷ネイチャーガイドをしていた時は、いつも奥只見湖上を渡って尾瀬口に到着するまでの船上で、湖底に沈んだ銀山平に思いを馳せていた。その銀山平の探検記があると知って手を尽くしたが、明治時代に発行された現物は未だに見たことがない。ここでは復刻版を元に紹介する。

1. **銀山平の位置**～新潟県湯之谷村(現魚沼市)の奥地、現在は電源開発により作られた巨大な人造湖「奥只見湖」の湖底150mに沈んでいる。
2. **銀山平の歴史**～1640(寛永18)年、只見川で銀の鉱石が発見され無人の原野がシルバーラッシュと化し一大鉱山町となった。以来1859(安政6)年に閉山されるまでの222年間にわたり佐渡金山とともに江戸幕府の財政を支えた、その後は無人の原野に戻っていた。
3. **明治に入り開墾**～桑畑は比較的良好よく育ち明治8年には出作り小屋が14件あった。明治43年、銀山拓殖(株)が設立され、定住する入植者の募集が行われた。地元新潟県内から約20戸、福島県檜枝岐村から約10戸の応募があった。
4. **銀山平探検隊**～明治34年北魚沼郡役所の発意で探検隊を組織。開墾・牧畜・養蚕・川魚・林業などの産業の現状を調査することを主目的とした。隊員32名、案内人11名、人夫17名の大探検隊であった。
5. **銀山平探検記**～明治37年、大竹庄次郎編集発行。
「書痴」の異名さえ付けられた小林義正著「山と書物」1957(昭和32)年(築地書館)に紹介されている。昭和58年巢鴨駅近くの山岳古書店「中央堂書店」の小野敏之さんに尋ねたところ10数年前に一度20数万円で古書市に出た事があるがその後は全く出ていないとの事だった。小林義正氏の蔵書は小谷隆一氏を経て信州大学山岳図書館に寄贈されているとの事であるが「銀山平探検記」も信州大学に保管されているかは未確認である。
6. **復刻版刊行**～探求していて入手出来ないうちにベースボールマガジン社から1990(平成2)年復刻版が出版された。同社の当時の社長池田恒雄氏は魚沼市のご出身であり私の高等学校の先輩でもある。出版の意図は不明であるが採算が合う企画とは思えず、何か地元に貢献したいという思いからかもしれない。復刻版は三部からなり「湖底幻影」と題して立派な函入りの豪華な仕上がりとなっている。

第一部～銀山平探検記の復刻版

第二部～銀山平探検記の現代語訳版



第三部～銀山平を取り巻く山々

木暮理太郎・高頭仁兵衛・三田幸夫・渡辺公平・藤島玄・川崎精雄他の先人の紀行文を紹介している。

また、第三部には以下の小出山の会会員3名(3名とも日本山岳会越後支部会員)も案内文を載せている。

櫻井昭吉 会員番号 5021番

井口拓夫 会員番号 5093番

松原良一 会員番号 10436番

7. **出版記念会**～ベースボールマガジン社から1991(平成3)年5月11日(土)、湯之谷村(現魚沼市)大湯温泉東栄館での出版記念会の案内をいただいたが、当時は勤務先が新潟市内で、あり、週休二日が実施される前で土曜日は午前中勤務(半ドン)があった。参加出来なかったことは残念であった。

武蔵野を歩く

小原 茂延

長いこと山歩きを続けてきたが、喜寿をもって一応卒業ということにした。

人によっては、80歳までは登りたい、あるいは歩けるうちは山に行きたい、といったご仁も多い。元会長の斎藤惇生さんなど、卒寿を越えて登山を続けていると支部報で読んだのは昨年初めであったか。さすがに伝統の山岳会、トレーニングの賜物か、達者な足腰の方々に感心するばかりである。数多くの山の紀行文や随想などを書いた串田孫一は、少年の頃から槇有恒などに登山とスキーを習ったそうだが、戦争で中断、再開後も脊柱管狭窄のような症状が出て、50代半ばくらいで山行を終わっている。深田久弥にしても百名山選定の自身で登っていない山を地元の岳人に案内を受けながら登る際に喘ぎながらとか、厳しいといった表現が垣間見られるのだが、年齢的には60代前半の頃かと思われる。

昨秋、武蔵野の俳を残す庭園で当会の富澤代表とぼったり出会った。国分寺にある日立中央研究所の庭園開放日でのことだ。この庭園は、年に春秋各1日の指定した2日のみ一般に開放しているのだが、かなり以前から来ようと思っていながら、つい日にちを確認しなかったり、忘れていたりして実現していなかったのだが、その何年かの1日に偶然の奇遇であった。富澤さんは登山や海外トレッキングも盛んに行かれている一方、自然保護活動も積極的に指導しているので、この日もグループで歩かれていた。園内は武蔵野の自然をそのまま残すといったコンセプトで管理されているのがわかり、ケヤキやヒマラヤスギの大木が天を突き、コナラやクヌギ、イヌシデなど武蔵野の雑木林を形成している樹種が豊富である。カエデその他の紅葉もはじまっており、十月桜が花をつけている。湧き水が数箇所あって流れとなり大池に注ぎ、池からは流出口の水門で調節されて野川の主要水源となっている。

国分寺駅に戻り、南口の殿ヶ谷戸庭園を右に見て(ここも湧き水の池を有して紅葉が見事)直進、東京経済大学の構内低地に新次郎池がある。元学長さんの名を付したそうであるが、小さいながら緑陰の湧水が綺麗である。流れ出た辺りで同じく武蔵野の池を歩いてきた方と会話を交わした。私は野川に沿って下り、川面を眺めていると高浜虚子の武蔵野吟行などの句が思い浮かんでくる。「流

れゆく大根の葉・・・」などと思っていたら、丁度、くだんの葉が瀬の中の石に引っ掛かっているのが見え、思わず苦笑した。

ほどなく「はけの森美術館」に着く。美術館は元、中村研一美術館と称していた頃にハイキング仲間と立ち寄ったことがあり、今回は伊東深水展が催されていた。山岳会の K さんがいると聞いていたので、展示のことや先頃の連絡会議の感想などを伺った。

山歩きに偏っていた傾向が強かった中高年を過ごしてきたが、最近は山の文化への興味を主とする方向へ舵を切り、文学・美術・博物関連のことをより深く知りたい、味わいたいと願うようになってきている。山を多様に楽しむという姿勢は相変わらずであるが、その所産を若き人たちへの伝承に努めることも忘れてはいけないと思うこの頃である。

～～《予告など》～～

3月山行：高尾山八十八大師めぐり

薬王院の大僧正が明治期に四国八十八ヶ所を巡礼、その霊場の土を持ち帰り山内に納め、大師像を建立したといわれています。今回は金比羅神社周辺の76～87を除く1～75、88札所を巡ります。

期日： 3月19日（木） 雨天中止

集合： 高尾山口駅 9時

コース： 高尾山口駅→（5分）→不動院→（25分）→琵琶滝→（5分）→二本松→（25分）
→十一丁目茶屋→（10分）→仏舍利塔→（10分）→薬王院→（20分）→高尾山頂
（昼食）→（4号路・2号路 45分）→蛇滝分岐→（25分）→蛇滝→（25分）→
蛇滝入り口・小仏川沿い→（50分）→高尾駅 ・歩行時間4時間5分

※ 急ぐ方、疲れた方は、蛇滝口からバスの利用もできます。

担当： CL小林敏博、SL夏原寿一

申込み： 3月16日までに夏原へ



4月定期総会

日時： 4月18日（土曜） 14時～ 場所： 集会室

議題： 2019年度事業報告・決算報告

2020年度事業計画案・予算案

※総会終了後は茶話会を予定しています。

※出席会員には新年度会費<1500円>を徴収させていただきます。

※同封の出欠連絡ハガキを4月11日（土）必着でお願いします。

5月山行： 5月19日（火）を予定しています。総会及び4月発行会報にて詳細連絡。

----- 編集後記 -----

2月も末になりましたが、今年最初の会報ということで、新年のご挨拶を。本年もよろしくお願ひ申し上げます。今は新型コロナウイルスの話題で持ちきりですが、どこにいても感染のリスクがあり、マスクも空しい感じがしています。むしろよく寝て食べてウィルスに負けない体を保つことが大事なのではないでしょうか。山歩きはきっと体に良いことだろうと思います。（荒井正人）

<次号予告> 4月24日発行の主な内容

2月講演報告、3月山行報告、総会報告など。

<皆様からの投稿をお待ちしています>